

R・D・ラムバート著

『インドの労働者、  
工場、社会変化』Richard D. Lambert, *Workers, Factories, and Social Change in India*, Princeton, Princeton Univ. Press, 1963, 247 p.

本書は、プーナにあるゴカール政治経済研究所 (Gokhale Institute of Politics and Economics) が実施しているプーナ市の社会経済生活についての実態調査の一環として行なわれた調査報告である。後進諸国が自国の経済発展のために力を注いでいる工業化の問題については、数多く論じられている。本書もインドの工業化の問題を取り扱ったものであるが、その焦点を工業化のみにない手である労働者、工場に合わせ、社会学の立場より論じている。著者の言葉をかりるならば、本書は二つの目的をもっている。その一つは、産業社会学およびインドの研究に関して実証的に詳細を明らかにすることである。このために、労働者の年齢、性別、学歴、読み書きの能力、カースト、家族構成、移住経歴をその土地の非工場人口との比較および工場内の各労働者の地位との関連において明らかにしている。また、労働者の職歴、現在の仕事についての方法、かれらの労働市場に対する認識、さらに各工場における階層的身分 (hierarchical positioning) の本質とそれに対する批判、賃銀と熟練階級間の適合の度合い、労働者間の水平移動と垂直移動の経歴、仕事に対する満足感と階層的地位との関係を明らかにしようとしている。いま一つの目的は、工業化と経済発展の全般的な過程を明らかにすることであり、(1)農村社会における産業労働力の募集と定着 (recruitment and commitment) の問題、(2)工場の類型、(3)社会革新としての工場、の3点よりこの問題を取り扱っている。

この調査のために、プーナにある民間工場五つが選ばれている。繊維工場、製紙工場、エンジン工場、ビスケット工場、ゴム工場が選ばれた5工場であるが、著者はまづこれら5工場をA、B、Cの三つに類型している。A型には製紙工場、ビスケット工場、ゴム工場が属し、B型には繊維工場が、C型にはエンジン工場が属している。この類型は、労働者と機械、同僚と上役との関係によって行なわれたもので、A型とは、労働者が個人で機械に対するのではなく、組単位で機械が最大限に原料を消費し処理するように世話をする。このような工場では

熟練工は普通監督官で労働力の小部分を占めるにすぎないのである。したがって機械よりも人間の数が多いのが特色である。B型とは、労働者が1人で1台ないしそれ以上の機械に当たっている。大半の労働者は半熟練工の水準を有し、その技能はかれらが受け持ちの機械に生産させうる度合いで測定される。C型とは、各労働者がただ単に機械に材料を供給するだけでなく、機械を運転監督する。このような生産工程では多くの分業化が必要とされ、工場内の種々の作業区の機能は常に連絡を保たねばならない。労働者の技能は完成品を作ることに絶対欠くことのできないものである。C型の工場では、機械は労働者にとって道具として存在する。

著者はこの三つに類型された工場が、それぞれの労働者の募集政策、その定着の程度と性質、そして労働力の内部組織においてどのように相違しているかを、さらに周辺の非工場社会機構との対比と伝統的社会組織に与える「衝撃」(impact)の強さについて明らかにしようとする。

この三つの類型の外に著者は、理論的適性に欠けてはいるがと断わりながら、5工場の創業年月で新・旧の型にも分けている。それによると、新型には、労働者数が614人のエンジン工場、159人のビスケット工場、531人のゴム工場が属し、旧型には2342人の繊維工場、603人の製紙工場が属する。旧型の工場は大体今世紀の初めごろに、新型はビスケット工場が1930年代に、他の2工場は第2次世界大戦終了直後に創業したものである。これら5工場の労働者を対象に、1957年1～3月に標本調査が行なわれ、その結果が本書の各章ごとに発表されている。

本書の内容は、第1章 序論、第2章 労働力の社会的性格、第3章 募集と定着、第4章 企業内組織、第5章 労働者と階級、の5章よりなっている。

第2章の労働力の社会的性格についての調査結果は、工場労働者とプーナ人口の横断面との差異はあまり認められていない。労働者の年齢は全般的に高く、独身者はごく少数である。数字をあげれば、5工場の平均年齢は32.4で、繊維工場の35.2が最高で、ゴム工場の27.2が最低となっている。教育面では、全然学校に行かなかった者が32.1%を占め、小学校卒業程度が約50%を占めている。妻帯者の数は61.8%と高い比率を占めている。さらに興味あることは、労働者は他の人々よりも大家族を有し、比較的所得の多い者ほど扶養家族を増員し、大家族を形成していることである。インド社会の特色の一つといわれている大家族制度が弱められるどころか、むしろ

強められているという印象すら受けるのである。著者が最初に類型した三つの型での比較においては、あまり差異の出なかったカースト、教育の面が、新・旧の型から見るとその差異を示し、新しい工場のほうが労働者の「質」(quality)も高く、旧型に属する繊維、製紙では無教育者の比率が40%あまりを占めているに対し、新型ではその比率は15%あまりにすぎず、中学卒業程度が20~25%を占めている。また、ブラフマン階級の比率も、旧型ではわずか10%足らずであったのに対し、新型ではビスケット工場が56.3%を示し、他の2工場でも30%あまりを占めている。本書に現われている数字だけから見ると、就業に際してのカーストの制約はだんだん弱められていると言える。しかしながら、これによってカースト制度それ自体が弱められてきたというのは早計である。

第3章の募集と定着について、著者はまずスロトキン、C・A・マイヤーズ、ムアーなどの諸説を紹介し、この調査で得た資料を定着理論に基づいて検討する。このため著者はW・E・ムアーとA・S・フレドマンの「定着の段階」論を引用する。ムアーとフレドマンは、「定着労働者(committed worker)は、土地とかれの部族的背景との関係をたち切っている。かれは完全に都市化され、けっして産業生活から離れようとしな。かれの家族は都市に永住し、妻も労働市場に登場することはめずらしいことでない。事実、労働力の定着度を調べるよい方法の一つは、労働力で占める婦人の比率である。非定着労働力あるいは半定着労働力は男性が圧倒的である」と述べている。これに対し、著者は労働者に、かれらが生活するに十分な金を蓄えたなら、村に帰りたいかとたずねたところ、労働者の30.8%が帰りたいと答えている。繊維工場では40.8%も帰ることを希望している。これは、労働者の約30%がプーナに生まれ、プーナで育ち、移住者の多くも農村からよりも他の都市から来ているという事実からみて、この答えは意外なものであった。また、工場労働者の中で婦人の占める比率は非常に低い。しかしながら、著者はこの現象で、労働者の定着度が低いと結論づけることはまちがっているという。

著者は、いま一つの調査として、各工場中で、他の仕事に従事することを希望したことの少ない労働者数を調べている。それによると、繊維、製紙の旧型工場が22%あまり、エンジン、ゴムの新型工場が7%あまりとなっている。この数字は若い世代のほうが定着度の強いことを示しているが、これも、若い世代が年取るにつれても同じであるかは、断面的調査ではわからない問題である。

本調査のような断面的調査では、離職者率の資料を得ることができないため、著者はさらに各工場における勤続年数を調べている。平均勤続年数の最も長いのは製紙工場の14.6年、最も短いのがゴム工場の1.8年となっているが、これを各工場の1950~56年の7年間に増員状況と比較すると、製紙工場の場合は493人から536人と年間増員は10人前後であるが、ゴム工場は、1950年の207人に対し1954年に295人、1955年に375人、1956年に473人と、2年間に当時の労働者数の半数以上が増員されている。したがって勤続年1.8というのも、この点を考慮しなければならぬ。

著者は、労働者の「定着」問題にかなり力を入れているが、その定着度を示すと思われる調査結果を得ることができなかったようである。この原因の一つとして、プーナがもつ社会環境の特殊性についての分析の欠如と、本調査のような断面的調査のもつ時間的制約をあげることができるであろう。

第4章の企業内組織で、特に興味を引くのは、各型の工場での賃銀階級図である。これによると、A型工場では水平型(slab outline)、B型工場がダイヤモンド型、C型がピラミッド型を示している。また、監督官と事務員の総額は、各工場とも大体労働者の10%と比較的安定している。事務員は独立したグループを形成し、賃金も大体同じで、他の職種との交流もまた内部移動もほとんどないといった状態にあることが明らかにされている。監督官は、新型工場では事務員と現場労働者と明確に区分されているが、旧型工場では生産過程に直接接触している。いま一つの特色として、垂直移動がほとんど見られない。わずかにC型工場で見受けられるにすぎない。

第5章の労働者と階級の中で、著者は工場が伝統的社会に及ぼす「衝撃」(impact)について述べている。著者はまず工場が伝統社会組織にもたらすと思われる移推の本質に関する一般理論から、この調査の結果を見ている。

「民俗社会」から「都市社会」への移推を実現する促進要因としての工場導入は、身分(status)の上に大きな影響を与える。非工場社会における身分に対する基盤は「帰属的身分」(ascribed status)であり、インドでは、カーストと種族関係である。これに対し、工場内での身分は職種と賃金で定められる。一般的に言って、カーストは工場内の格づけ(ranking)にあまり反映されていないといえる。しかし、ブラフマンであるか、あるいは下級カーストの者であるか、ということが、相違をもたら

していることも事実である。調査の結果、事務員は大體ブラフマンが占めていた。現場労働者の間で、ブラフマンであるということはなんの助けにもなっていない。

カーストは「帰属的身分」の規準に、教育は「獲得的身分」(achieved status)の規準になっている。一般的理論から言えば、すなわち、「帰属的身分」が「獲得的身分」にとって代わるということから見れば、カーストが「格づけ」に対する基盤として教育にその座を明け渡すことになる。しかし、この両者は非常にからみ合っており、二つに分けることは困難である。教育が一般社会において「獲得的身分」の属性であることは事実であるが、工場においては、「業務達成」(job performance)が大きな比重を占める。したがって、教育が工場内で「獲得的身分」の属性として認められるには上位の「業務達成」に役立つことが必要とされる。このような視点から著者は、工場が社会革新の要因としてインドの近代化に及ぼしている影響を明らかにしようとしているが、それもつぎのような言葉で終わらざるをえなかった。「ゲメインシャフトからゲゼルシャフトへの推移という意味でのインドの近代化にとって、工場誘致が主要な媒介となるな

らば、この研究の結果はインドの近代化の道は遠いものであることを示している。」

以上、本書の概要を紹介したが、著者の最初に意図した目標の解明は不成功に終わったようである。本書は労働力の定着にしる、工場のもたらす伝統的社会組織に対する影響の問題にしても、西欧社会が工業化によって歩んできた過程と相違する現象を数多く列挙することで終わっている。

著者が社会学者であるということから、インドの工業化についての諸問題を、インド社会の分析を行ないながら取り扱っていることを期待したのであるが、満足することができなかった。しかしながら、本書によって、インドの特殊な面が浮き彫りにされていることは否定できない事実であり、この点を明らかにしたということで本書のもつ意義は大きいと言える。

著書がさらにこの調査で明らかにされたインドの特殊性を、インド社会およびインド人の社会生活の根底となり、基盤となっているヒンズーイズムの解明に立脚してその原因を分析されることを期待したい。

(図書資料部 松谷賢次郎)

## インド村落の社会経済構造

—— 調査研究報告双書 第51集 ——

福武 直・大内 力・中根千枝 共著

### 第1部 畑作農村 グジャラート州サミアラ村

#### 第1章 村の概況

#### 第2章 村の経済

—— 人口の構成・農業および農家・その他の職業 ——

#### 第3章 家族とカースト

—— 生活単位としての家族・家族の構造・血縁組織とカースト・婚姻組織とカースト ——

#### 第4章 村落の社会構造

—— 村落社会の構成・村落自治の実態・村落構造の変容 ——

### 第2部 水田農村 西ベンガル州シュプール村

#### 第1章 村の概況

#### 第2章 村の経済

—— 人口の構成・農業および農家・その他の職業 ——

#### 第3章 家族とカースト

—— カーストと血縁関係・家族の構造・相続・結婚 ——

#### 第4章 村落社会の構造

—— 村落の社会構成・村落自治の実態・村落構成の変容 ——

調査村の地図

インド農村調査日記抄